# HIMOKITA FRONT



#### 時がつくるまちの顔

下北沢の名所になっていた戦後に形成された駅前食品市場の界隈が 再開発されて、駅前広場が整備されつつある。広場の一辺を縁取る商 業ビルがシモキタフロントだ。再開発でこれまでの時間がリセットさ れた場所に商店街の新たな顔となる建築が求められた。時がまちの顔 をつくって行くように、時間を経るごとに建築が味わいをますように、 外壁を銅板葺きとし、四季を彩る草木を立体的に植えた。竣工はこの 建築の完成ではない。まちに、この建築に人々が行き交い、幾世代か が過ぎるうちに、木々は茂り、赤銅色にきらめく建築は徐々に黒くなり、 やがて緑青色になる。現在の事業主も計画者、施工者も生きていない だろうが、この建築が緑青に覆われる未来をイメージしながらプロジェ クトは進められた。





# 駅前食品市場の記憶

外壁を切り裂くように、立体の路地が展開する。在来種の草木が買い物客の行き交う階 段や通路の傍を四季の変化で彩る。広場から見ると草木の道が色々なテナントをつないでいる。 広場の整備により駅前食品市場の痕跡は消えてしまったが、かつてここにあった路地のヒューマン スケールな魅力をなんとか継承したいと考え、建築の立面に展開する路地を考えた。







### 商店街の風景としての 小さな要素の集積

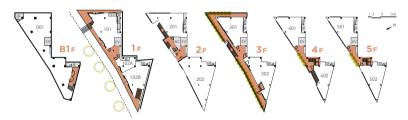
この建物は「東通り商店街」「南口商店街」の軸 線上にある。小さな建物や店の看板が並ぶ商店街の 街並みの先にこの建築が見える。この2つの商店街 から見ると銅板の外壁が分断されたところから、視 線が空へと抜ける。

小さな銅板群、風にそよぐ草木、小さな木の集まっ た天井、垣間見える空の集合体が商店街の新たなア イストップとなった。壁を大きな面とせずに小さな 要素の集積とすることで、シモキタの商店街の風景 から生まれたような佇まいができた。

### 再開発による

#### 時間と空間の切断を刻印する

新しくできる駅前広場の一辺は既存のまちのグリッドを斜めに切断してい る。そして、この建築はまちのグリッドと方向性を合わせた構造グリッドとそれ を斜めに切断する広場側のファサードで構成されている。商店街から建物を買いて空 が見えるのは、広場側のファサードを切り取って、まちのグリッドを表出させた部分である。 さらに、軒天井の仕上げ木材がファサード面で斜めに切断されているのは、天井はまちのグリッドに従っているからである。 このようによく見ると、この建築は下北沢に起きた時間と空間の切断という大きな出来事を刻印している。















# 賃貸不動産としての効率の最大化と立体路地

商業テナントビルとして貸し床面積の最大化と高いレンタブル費の実現は必須であった。屋外階段を設 けることで階段は1つとすることができ、レンタブル費が上がる。この階段が立体路地となれば賃貸不動 産としての効率を担保しながら、まちの記憶を継承しつつ、広場に対して積極的にアクティビティを見せ

るファサードができると考えた。最初は東から





